

論文審査の結果の要旨

氏名 リー ジーリン

本論文は5章から構成されている。ショップハウスとは、華南から東南アジアの都市で広く見られ、奥行きが深く間口の狭い敷地に路面式で立つ店舗併用住宅の総称であり、本論文はシンガポールのショップハウスのファサードの形態的特性とその社会的背景を論じたものである。

本論文は五章 (Part) から構成される:

第一章「序章: アイデンティティとシンガポールのショップハウス」においては研究の目的、方法が概説される。特に植民地として成長したシンガポールは、民族的アイデンティティの問題が複雑であり単純には規定しがたいが、一方で、それゆえ強く希求されていることが述べられる。そしてシンガポールのショップハウスはアジアの混雑性の表現であるとする。続いて関連論文のレビューが行なわれ、著者が関心をもつショップハウスのファサードに関する包括的な研究が少ないことを指摘している。続いて、論文の目的として、1) ファサードの建築的要素の分析を基礎にした実証的研究、2) 植民地シンガポールにおける民族表現としてのショップハウスファサードの役割の検討、3) ショップハウスの民族性研究の現代アジアにおける意味付けの三つとしている。一方、研究方法は、シンガポール都心部でショップハウスが多く残る二地区の約991事例について実測と歴史資料との突き合わせで、詳細なデジタル実測図を作成し、それを原資料として、言語学的類推で語彙と統語法として分析している。

第二章「記述的研究——シンガポールショップハウスタイポロジー」では、英国による都市政策、英国植民都市からの中国系移民の流れ、そして中国沿海部からの大量の移民、マレー人等の他の民族との構成比の変化などシンガポールのショップハウスが形成される社会的背景が概観される。

第三章「幾何学的研究——現地調査」では、現地調査による調査データに基づいて CAD 図面起こし、定量的な手法による語彙と統語法の抽出という分析手順が示される。調査データは、シンガポール国立文書局の資料ならびにシンガポール都市再開発局の資料との相互比較もなされている。調査地域された二地域の991例の1824年から1960年に渡るショップハウスに見られる、民族表現の実態が説明され、語彙を構成する要素の定義が行なわれ、各語彙の使われ方には時系列的にいくつかの特徴があることが指摘され、ショップハウスの様式的変化を3つの様式(初期、民族的バロック期、アールデコ期)とそれぞれの中間の遷移期として捉えている。

第四章「発見の詳細検討と分析」の前半では、ショップハウスにおける多文化的影響を「語彙」毎に特定している。また、他文化の語彙の利用は脱意味的に行なわれ、実利主義が基調をなしているとしている。また、語彙の流通には、現地で活躍した中国系大工や無資格の設計事務所勤務の中国人が大きな役割を担ったとしている。こうした背景の認識を基礎に、語彙についての記述法の定義と各要素の面積の全体のファサードにおけ

る占有率の検討を行っている。この結果、ショップハウスの統語法として、民族的な屋根+欧州古典式枠組み+民族的（欧州古典も含む）要素をもった胴部を提示している。続いて、本土では儒教的に倫理を柱とする封建制のなかで社会的に最低位に位置づけられた商人達がアジアの地で自己実現をし、それがショップハウスのファサードに表現されているとしている。

第5章では、まとめとして上記各部の分析結果を再確認したうえで、現代における地域主義の問題について著者の意見を述べている

本論文の弱点は、著者が属する華僑文化を中心に置きすぎ、周辺の地域文化に属する都市と建築の交渉史に関する歴史的な理解に難があることであろう。しかし一方で、的確で示唆的なフィールドサーベイをおこない膨大な数のショップハウスに関して正確なデータベースを作り上げ、それを元に様式的展開を実証的な基礎の上に議論を展開し、今後のショップハウスならびに東南アジアの植民地建築に関する後続の研究実施に基礎を形作ったことなど、いずれも高く評価されるべきであり、先にあげた弱点を補って余りある。

以上により、本論文は博士（環境学）の学位を授与できる質を十分に有していると認める。